

精神障害者家族の家族支援論に求められる視点の検討

— 「家族による家族学習会」の「事後の振り返り」場面に着目して —

生涯学習基盤経営コース 末 光 翔

A Study on Family Support for a Person with Mental Illness focusing on Discursive Resources and Reflection of the "Omotenashi-Family Experiences Learning Program"

Sho SUEMITSU

This study aims to consider the condition of scene in which families caring for a person with a serious mental illness can enrich their discursive resources to educe their potential for holding discussion with professionals such as psychiatrists and conferring their individual needs. Content analysis was conducted through a reflection meeting in which family members gather to manage the self-help group "Omotenashi-Family Experiences Learning Program." This study reveals that members of the reflection meeting could enrich their discursive resources in the course of confessing their trials and worries to their peers and in experiencing their support and understanding. Moreover, it is arguable that the "middle-ground" created by the group, which assumes both the openness of a public sphere and the support of an intimate sphere, contributes to enriching their discursive resources due to its ability to fluctuate between the two and allow for greater discursive resources.

目次

- 1 本論文の目的
 - A 研究課題と目的
 - B 課題設定の視点「言説の資源」
- 2 事例「家族による家族学習会」の概要・視点
 - A 家族会活動への注目
 - B 「家族による家族学習会」の概要
- 3 具体的な観察場面・対象
 - A 「事後の振り返り」の観察
 - B 分析・記述の方法
- 4 事例の記述・解釈
 - A 分節・場面ごとの推移
 - B 「言説の資源」充実の場に関する考察
- 5 本論の総括と今後の展望

1 本論文の目的

A 研究課題と目的

精神障害者の家族に関する研究は従来、保健・福祉・医療といった専門家の立場から行われてきた。戦後初期の1940年代から1960年代にかけて、家族を統合失調症の病因とする見方（家族病因論）から事例研究が行われたのを発端に、感情表出（Expressed

Emotion）といった家族が患者本人に与える影響が実証的に明らかにされた。それらの知見のもと、家族の対処技能の改善を図る家族心理教育の理論と方法が発展し、日本にも普及したとされる¹⁾。近年では、当事者の身近なケアを担う「援助者としての家族」だけではなく、「生活者としての家族」として家族を捉えた上で支援を図るべきという指摘がなされ²⁾、家族の困難と対処への理解を深める研究や、保健師・訪問看護師といった専門職の具体的な支援のあり方に関する研究が蓄積されている。

一方、従来の家族研究は研究者が所属する一領域だけの支援について論じたものが中心であり、それらの限界が指摘されている。田野中は、社会復帰制度やデイケア施設などの整備が進み、統合失調症や家族を支える社会資源が多様化した現在、個々のケースに合わせたサービスの選択、連携が求められるため、特定の専門職の立場からのみの検討では不十分であるという³⁾。それに関連して伊藤は、専門職との関わりの中で変化する家族のニーズについて、それらの変化をとらえる場が必要であり、そのために“家族が安心して自分たちの体験を語り、他者の体験に耳を傾ける、そのような“情報”の交換がなされる対話を続けられる場”（以下、“対話の場”と略す）を確保し続けること

が専門職の家族支援に求められると指摘している⁴⁾。

近年の精神保健福祉分野における家族支援では専門家一家族間の“対話の場”の形成が重視される一方、専門家が直接介入・支援を行わない家族主体の相互扶助活動について、前述したような“対話の場”の形成・維持のあり方に注目してその活動の具体的なあり方を論じる研究はこれまでほとんど見られない。

日本の精神障害者家族の場合、旧来より精神障害を有する本人との同居率が高く、本人への支援をめぐる家族の負担が著しく大きいにも関わらず、家族が専門家や社会資源へとつながり適切な支援を得るまでに複数の障壁(後述)が存在することが指摘されている⁵⁾。これらの障壁は、前述したような専門家一家族間の対話の場の形成を阻害するものであり、その中でも家族の内面に関わる障壁は家族の主体的な学習ないし心理的な変化によって解消されると考えられる。そのため専門家一家族間における“対話の場”の形成以前の段階として、専門家が関与しない家族同士の学習活動・相互扶助活動に注目する必要がある。本論の目的は、家族に心理的な変化を促し障壁を解消することが可能な場(後述する家族が「言説の資源」を充実させる場)はどのような性質を持ち、どのような条件で成立するかについて、具体的な家族の活動場面から検討することにある。

B 課題設定の視点「言説の資源」

伊藤が述べた“対話の場”の形成・維持の課題をより具体的に考えるにあたり、齋藤が「ニーズ解釈の政治」への参加と「言説の資源」の格差という観点から論じた以下の議論を参照していく。「ニーズ解釈の政治」とは、人が何らかの必要に迫られたとき、それを公共的に対応すべきニーズとして解釈するか、それともそうした必要を個人/家族によって充足されるべきものとするかを争う言説のやり取りであるという⁶⁾。そしてそのような「ニーズ解釈の政治」に参入する資源のことを、齋藤は「言説の資源」と呼び、“最も切実な必要を抱えているはずの人びとが「ニーズ解釈の政治」に参入する資源において最も乏しいという逆説的な事態”⁷⁾に置かれていると課題化している。

ここでいう「言説の資源」とは量的な多寡ではなく質的な優劣であり、構成する要素として3つの観点から挙げられる⁸⁾。第一は、自らの問題関心を説明し、他者を説得しうる理由を挙げていく上で、“人びとがどのような語彙をもっているか”という点である。(これを本論では「資源【語彙】」と称する)もし問題を

語る上で適切な語彙を持っていなければ、そうした言説は公共の場で力を持たない。その例として、金融・医療・先端科学技術などの領域における専門知と日常知の非対称性が挙げられる。第二は、“言葉をどのように語ることができるかという言説のトーン(語り方・書き方)”である。(これを本論では「資源【トーン】」と称する)「合理的」とされている語り方は感情の抑制、話の簡潔さを暗黙のうちに求められる。一方で「黄色い声」、「うざったい声」など、特に身体性が前面に出る語り方は、内容が問われる以前に公共の言説の空間から遠ざかられがちであるという。第三に齋藤は、“公私の区別をわきまえ、公共の場に相応しいテーマを語らなければならないという暗黙の規範的要求の問題”を挙げている。(これを「資源【規範】」と称する)「個人的なもの」を差し控えることのできない言説は排除の対象となり、場に相応しい主題を選べるかどうか「言説の資源」に関わってくるという。これについて齋藤は、“公共的領域と私的領域の境界は固定したものではなく、何をもって「私的」とするかという言説によって書き換えられる”と指摘し、この第三の問題を重視している⁹⁾。ここから、「資源【規範】」には公共の場に相応しいテーマを語ることができるかどうかという点に加え、自分の語りたいテーマをその場に相応しいと認めさせることができるかという、より積極的な意味合いがうかがえる。

特にこの「資源【規範】」の視点は、精神障害者の家族支援のあり方を考える際に重要となる。蔭山は、当事者の病気に関して家族が周りの人々や支援者に支援を求める際、「内側の障壁」と「外側の障壁」の「二重の障壁」があると指摘している。「内側の障壁」は、家族自身が精神疾患に対する「内なる偏見(セルフ・スティグマ)」により、当事者の精神疾患を恥と考えて隠してしまう課題を指している。また「外側の障壁」は、家族がやっとの思いで専門機関に相談しても、専門機関の側は「本人を連れてこない」と相談対応できないといった支援の条件やルールを示すだけで、誠意ある対応をしてくれない場合が多いことを指している¹⁰⁾。「資源【規範】」は、この「二重の障壁」と関わりが深い。「内なる偏見(セルフ・スティグマ)」には障害・疾患に関する偏見のみならず、病気の家族のケアは家族の責任であり、家族の手によってなされるべき「私事」であるという規範も含まれているものと考えられる。そのためこの「内側の障壁」の解消を目指す場合、家族の「資源【規範】」の状況に焦点を当て、その質的な充実を図る必要がある。その質的な充実と

は、精神障害者の家族の場合、「精神疾患・障害の当事者のみならず、本来自分がケアを担うべき他の家族や、自身の心身の問題についても専門家に訴えて良い」などといった形での認識の変化が想定される¹¹⁾。その上で、専門家に自分たちのニーズを伝えるための「資源【語彙】」（ここでは疾患に関わる専門知識の有無）、「資源【トーン】」（安定した伝え方）等の充実が必要となる。

これらの観点から、家族の「二重の障壁」を解消し、専門家一家族間の「対話の場」を形成・維持する上でどのような場が新たに求められるのか、つまり家族が「言説の資源」を充実させる場がどのような性質を持ち、どのような条件で成立するのが検討される必要がある。

2 事例「家族による家族学習会」の概要・視点

A 家族会活動への注目

前述の「言説の資源」充実の場の具体的な様相を検討する際、精神障害者家族の家族会（セルフヘルプ・グループ）による相互互助・学習活動が注目される。セルフヘルプ・グループ活動はその主な機能として「ヘルパー・セラピー原則」¹²⁾、「体験的知識」¹³⁾の共有が挙げられる。それらによって自らの生活をコントロールし得るという体験を積み重ね、自分には「力がある」という感覚を高めるといった側面を持つ。三島によれば、個々のグループの活動だけではどうにも解決できない社会資源の制約、サポート体制の欠如といった社会構造的な問題について、それらの構造的な社会変革を志向するセルフヘルプ・グループ運動を組織化する上でも、先ほど挙げたようなセルフヘルプ・グループの特徴はその基盤になり得るとい¹⁴⁾。

先ほどの齋藤も「言説の資源」の課題に関してセルフヘルプ・グループに着目し、「公共圏」「親密圏」の区分からその期待される機能を論じている。齋藤の定義によれば、公共圏が“人びとの間にある共通の問題への関心によって成立する”空間であるのに対し、親密圏は“具体的な他者の生/生命への配慮・関心によって形成・維持される”（傍点原文、以下同じ）空間であるという¹⁵⁾。また親密圏は、“恐怖を抱かずに話すことができるという感情、無視されはしないだろうという感情、（中略）つまり、排斥されてはならないという感情”を伴う空間であり、そのような相対的に安全な空間で自尊あるいは名誉の感情を回復し、抵抗の力を獲得・再獲得するための拠りどころとなりう

るとしている¹⁶⁾。齋藤はこの区分に基づき、セルフヘルプ・グループを“情報や意見の交換を通じて直面する問題への認識を深め、外に向かって問題を提起していくという公共圏の側面”をあわせもつこともあるが、“互いの生の具体的な困難に注目を寄せるという側面”が不可欠であるとしている¹⁷⁾。

これらの議論から、セルフヘルプ・グループは個別性としての親密圏、共通性としての公共圏が重なる、曖昧な空間であることが読み取れる。そしてこの性質は、前述の「言説の資源」の課題にも応え得る。先に述べた「資源【規範】」が乏しく、自身の家族の状況といった「私的なもの」を誰にも相談できずに抱え込んでしまっていた家族が、それらを安心して語れる空間でありうると同時に、それらの言葉を基盤として障害当事者・家族の権利擁護、制度改革といったより「公共的なもの」が語られる空間であるために、自身の「私的な」苦悩、心配事をより広く社会に訴えるべきニーズとして位置づけ直すことを可能とする、そのような空間であると考えられる。そのため、家族の「言説の資源」を充実させる場の条件として、「私的」な言説と「公共的」な言説が入り交じり、それゆえにニーズとして検討すべき公私の境界線がその空間の参加者にとって変動しうる場であることが考えられる。

B 「家族による家族学習会」の概要

以上の観点から、精神障害者家族会の相互互助・学習活動のうち、特に「家族による家族学習会」と呼ばれる共助プログラムを事例として検討を行う。「家族による家族学習会」プログラムとは、精神疾患を患った人の家族を「参加者」に迎え、同じ立場の家族が「担当者」としてチームで運営・進行する、10-15人程度の小グループで行う体系的な家族ピア教育プログラムである。1回3時間、1コース5回である¹⁸⁾。

家族学習会プログラムはその基盤となる原則として、①家族同士の体験的知識に価値を置くこと、②本人の疾患・治療・回復・対応の仕方などの正しい情報と家族が必要とする情報を共有する、③家族同士の語り合いを重視する、④家族自身の回復に焦点をあてる、という点を重視している。参加者に対する「おもてなし」の心構え・姿勢、グループ学習の進行の工夫、担当者チームのチームワークの工夫等のプログラム技術が明文化され、実施マニュアルへの掲載や研修会の実施といった形で共有されている。

プログラムは地域の家族会単体が運営主体となって行われる。家族学習会の開催・運営、当日のグループ

学習の進行を行う家族のスタッフは「担当者」と呼ばれ、回ごとに「リーダー」と「コリーダー」に分かれて役割分担を行う。「リーダー」はあくまで当日の進行と時間の管理が担当であり、「コリーダー」が臨機応変に発言し、参加者に発言を勧めることで参加者の話しやすい雰囲気を作ることが重視されている。

また、都道府県の家族会連合会組織からのサポートとして、家族学習会プログラムを複数回担当者として経験した家族が「アドバイザー」となり、担当者向けの研修会を実施するほか、近隣地域の家族学習会を訪問し、学習活動のサポート・見守りを行う¹⁹⁾。そこでは「担当者」による事前打ち合わせ・「事後の振り返り」に参加し、学習会がより効果的で充実した場となるように自身の経験や工夫等を伝える。参加者を交えたグループ学習の最中は会場後方で見学のみを行い、学習の進行自体には関与しない。

2007年に埼玉の家族会で開始されて以来、関東の家族や研究者を中心に全国的な普及活動が進められ、現在では毎年約50箇所の家族会で実施、これまでのべ2500名以上の家族が参加している。研究者らによる質的・量的評価も進められ、家族のエンパワメントの効果等が明らかにされている²⁰⁾。

特にこれまでの「言説の資源」論の文脈から、家族会が家族学習会プログラムの継続意向を決めた要因として「肯定的話し合い」「新目標」を挙げている点が注目される²¹⁾。精神障害の家族会はその歴史として運動体としての性質を強く持ち、連合会のレベルでは権利擁護・陳情活動、単会のレベルでは作業所運営といった社会的活動に従事せざるを得ない状況が存在した²²⁾。2006年の障害者自立支援法（現障害者総合支援法）施行以来、作業所運営という従来の役割から解放された家族会は現在、家族会員の高齢化や活動の停滞といった行き詰まりの状況下にあり²³⁾、役割の見直しが進められている。その中で、家族の苦労や孤立、疲労、混乱といった切実かつ「私的な」言葉をまずは安心して語り合える空間（「親密圏」）として役割を担おうとする状況が「家族による家族学習会」への注目として表れている。

3 具体的な観察場面・対象

A 「事後の振り返り」の観察

以上の背景を踏まえ、「言説の資源」充実の場の条件を検討するため、特にプログラム中の「事後の振り返り」の場面に注目し、観察及び分析・記述を行った。

「事後の振り返り」とは、担当者と参加者によるグループ学習の終了後、担当者とアドバイザー（グループ学習の観察者）によって行われる、当日の学習振り返りの時間を指す。「①参加者のアンケートを読み合わせ、参加者の様子について振り返りながら、担当者一人ひとりが取り組みについて振り返る」「②担当者が意見を出し切った頃に、アドバイザーが客観的に見て良かったこと、改善するともっと良くなることを伝える」といった基本的な段取りがあり、通常30分程度の時間を取る。

グループ学習の場面では参加者の個人的な苦労や悩み、心配事といった「私的な」本音を引き出すことに注力するのに対し、「事後の振り返り」の場面では担当者とアドバイザーとの間で、実施マニュアルやプログラム原則の言葉に沿ったより「公的な」発言と、そこから外れた「私的な」発言が入り混じる空間であると考えられる。また、それらの発言を他の担当者やアドバイザーがどのように受け止めるかにより、「振り返り」の場でどのような発言が許容されるかという公私の境界線が変動しうる。それはつまり、「振り返り」の場を通じて、「言説の資源」特に「資源【規範】」のダイナミズムが観察可能であることを意味する。また、アドバイザーという外部の家族が担当者同士の対話に参加できる数少ない場面でもあるため、担当者同士の振り返りを通じた学習の具体的な支援論としてこれらの議論を展開することが可能である。

本論では、2016年度にある関東近辺で行われた家族学習会Aにおける「事後の振り返り」の場面について、「言説の資源」特に「資源【規範】」をめぐる家族スタッフ（担当者）間の対話・関係の性質が変化していく過程を追う。家族学習会Aの担当者は、学習会担当歴6回のベテラン担当者（b氏）、学習会担当歴3～4回の中堅担当者3名（c氏、e氏、g氏）、初めて担当者を経験する担当者2名（d氏、f氏）の6名で構成される。年齢層は、60代女性が3名、70代女性が2名、70代男性が1名と、高齢女性が中心である。家族学習会Aの参加者は8名であり、それぞれが担当者の所属する家族会に所属し、家族学習会の参加者募集を受けて今回の学習会に参加してきている。以上、家族学習会Aのグループ学習は担当者6名と参加者8名の14名の家族で実施された。「事後の振り返り」では担当者6名に加え、同県出身のアドバイザー（a氏）が加わり、7名の家族によって行われた。

筆者は、アドバイザーa氏が訪問する家族学習会Aの初回、及び第四回に同伴する形で訪問し、それぞれ

事前準備会、担当者と参加者によるグループ学習、「事後の振り返り」の場面を見学した²⁴⁾。また「事後の振り返り」の場面について、担当者グループおよびアドバイザー a 氏に許可を得てICレコーダーによる録音を行い、逐語録の作成を行った²⁵⁾。

B 分析・記述の方法

家族学習会Aの「事後の振り返り」場面について、「言説の資源」特に「資源【規範】」をめぐる対話・関係の性質が変化していくプロセスを追跡するため、重松²⁶⁾、日比²⁷⁾の授業分析の手法を用いて事例分析を行った。具体的な手続きとして、以下の手順で「事後の振り返り」場面の細分化を行った。1. 振り返りの逐語録について、発言している人物（「発言者」）の変化、発言されている内容（「発言内容」）の変化の状況に応じて分節分けを行った。2. それぞれ区分した分節について、「主な話し合いの内容」、「家族の発言とその内容」、「発言された主な概念」、「振り返りの場における位置づけ」の4項目から記述を行った。3. 「言説の資源」に関する対話・関係の性質の変化について、分節ごとの特徴や全体を通した流れの特徴の把握に努めた。

また、これらの場面を記述する際、家族間の関係の変化のプロセスを明示するため、刈宿ら²⁸⁾が提唱するワークショップの分析単位「F2LOモデル」を参照した。これは、ワークショップの多様で複雑なあり方を捉える際に最小限必要となる構成要素として化学式H₂Oの比喩を用い、ワークショップの主体となる「学習者(L, Learner)」、学習者の参加のプロセスをデザインしその参加過程をサポートする「ファシリテーター(F, Facilitator)」、学習者が取り組む何らかの作業「対象(O, Object)」の三要素の関係を記述するモデルである²⁹⁾。

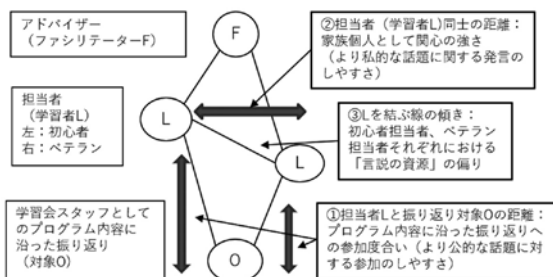


Figure 1: 「F2LOモデル」に基づく「事後の振り返り」場面の記述

これを「家族による家族学習会」の「事後の振り返り」場面の記述に用いる場合、Figure 1のように描写される。「学習者(L)」は振り返りの主体である「担当者」、また「ファシリテーター(F)」は担当者の振り返りを見守り、グループ学習の進行や対応の視点・工夫を伝える「アドバイザー」にあたる。「対象(O)」には「学習会スタッフとしてのプログラム内容に沿った振り返り」が当てはまる。さらに、「言説の資源」特に「資源【規範】」をめぐる家族同士の関係の変化、空間の特徴を捉える上で、以下のようにF2LOの描写を行う。①「LとOの距離」によって、それぞれのLの「学習会スタッフとしての振り返り」への参加度合い(より公的な話題に対する参加のしやすさ)を表す②「LとLの距離」によって、担当者同士の個人としての関心の強さ(より私的な話題に関する発言のしやすさ)を表す③左のLを学習会経験の少ない初心者担当者、右のLを学習会経験の豊富なベテラン・中堅担当者とし、それぞれのOとの距離が異なる(2Lが斜めの線で結ばれる)場合、家族間に「言説の資源」特に「資源【規範】」の偏りが存在するものと捉える。これらに注目する背景として、経験を多く積んだ担当者の方が、よりプログラムの内容やその言語を習熟しているために「事後の振り返り」の場に参加しやすく、一方で経験の浅い担当者にとっては発言の要領がつかめず、自身の感触や印象といった「私的なもの」が共有されづらい場となりがちな状況が挙げられる。このような課題を、家族のミクロなレベルにおける「言説の資源」の偏りの課題として注視する。

4 事例の記述・解釈

A 分節・場面ごとの推移

家族学習会A初回の「事後の振り返り」について、以下のTable 1のような整理を行った。またこれらの分節は「言説の資源」をめぐる対話・関係の変化のプロセスとして、大きく「場面1:分節1~分節4」、「場面2:分節5~分節8」、「場面3:分節9~分節13」に分けられた。以下、〈場面状況〉とその〈解釈〉に分けて各場面を検討する。

〈場面状況〉「場面1:分節1~分節4」の段階では、担当者グループが準備した振り返りチェックリストに沿い、学習会全体の進行に関して担当者全体で確認を行った。項目はそれぞれ、「テキスト内容の大切なポイントについて話し合えたか」、「参加者の発言を引き出せたか」、「話の長さに偏りはなかったか」などであ

Table1：家族学習会A初回「事後の振り返り」の分節表

<分節>	<主な話し合いの内容>	<発言された主な概念>	<振り返りの場における位置づけ>
1	全体の流れに沿った反省	「初回の備りのしょうがなさ」	【初回の内容への評価が保留される】
2	アドバイザーからのコメント	「ウォーミングアップの重要性」	【学習会の大事な要素を確認する】
3	担当者の反応	「病気から離れる話題振り」	【学習会の大事な要素を確認する】
4	アドバイザーの再コメント	「おもてなしの気持ちの重要性」	【学習会の大事な要素を確認する】
5	司会担当者の振り返り	「会場作りの苦労」「学習会運営へのプレッシャー」	【担当者の個人的な感情が打ち明けられる】
		「担当者の関係づくりの重要性」	→【チームワークの重要性が確認される】
6	担当者の役割への注目	「司会としての反省」「コリダーへの感謝・評価」	【担当者同士の感謝・評価が行われる】
		「コリダーの本来の強み」	【担当者の自己評価が修正される】
7	振り返りの進行自体への評価	「家族の強みに着目した振り返り」「振り返りの進行を本番に活かす」	【振り返りの進行自体が評価される】
8	担当者の気づきの表明	「自分の言葉で伝えることの難しさ」	【担当者の個人的な気づきが共有される】
9	担当者の個人的な振り返り1	「昨年度までの参加者が担当者に」「他の会の家族と会う機会に」	【学習会への前向きな姿勢が共有される】
10	担当者の個人的な振り返り2	「参加者募集時の苦労」	【学習会運営の改善案が出される】
11	担当者の個人的な振り返り3	「参加者以上の学び」「家族にメッセージを送る場」	【学習会への前向きな姿勢が共有される】
12	担当者の個人的な振り返り4	「事前準備時の助け合い」	【チームワークの重要性が確認される】
13	担当者の個人的な振り返り5	「担当者として自覚が強すぎた」「臨機応変な対応が重要」	【担当者の自己評価が修正される】
14	アドバイザーのまとめ	「参加者は柔らかくなっていく」	【参加者の変化のゴールを共有する】

る。分節1ではそれらの項目について、ベテラン担当者のb氏と中堅担当者のe氏を中心に、「初回だから話の長さに偏りはあったが、多少はしょうがない」といった【初回の内容への評価が保留される】ゆるやかな判断が行われた。

分節2から分節4はアドバイザーa氏のコメントとリーダー担当のb氏の応答が中心に行われた。アドバイザーのa氏は担当者の声かけの良さを評価しつつ、学習会中にウォーミングアップを行わなかったことに触れてその重要性を伝えている。「オリンピックに関する話題」といった些細なテーマのものでも、家族が当事者のことからいったん離れ、自分自身の存在を取り戻すという意味でプログラムの重要な要素であるという。リーダー担当のb氏もそれを受けて、分節3で「病気から離れたところで話題を振っていく」ことが確かに重要だと応えている。

<解釈>この一連の場面では、初めて担当者を経験するd氏、f氏の発言がほとんどなく、文節2から分節4におけるアドバイザーa氏との応答もリーダー担当のb氏によって行われている。プログラムの原則に精通しているベテラン担当者が振り返りに参加しやすい一方、初心者担当者は振り返りに参加しにくい段階にある。Figure 2のように、担当者間で「言説の資源」の偏りが発生していると考えられる。

<場面状況>「場面2：分節5～分節8」の段階では、アドバイザーa氏の声かけにより、担当者一人ひとりの振り返りが進められた。分節5では、リーダー担当

のb氏から、「会場づくりの苦労」や「学習会運営へのプレッシャー」など、家族学習会における担当者の役割とは直接関与しない、個人的な感情に関する振り返りが中心に行われた。以下の発言のように、自分の家族に関する心配ごとを抱えながら、学習会運営に対してプレッシャーを感じていたことが打ち明けられた。

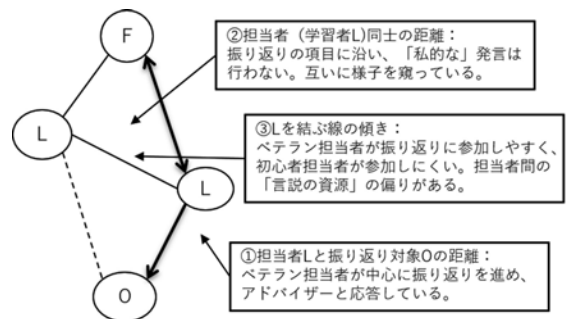


Figure 2：「場面1：分節1～分節4」のF2LO図

<分節5「学習会運営へのプレッシャー」>

b：(当事者以外で入院中の家族がいるという心配もあり,) そういうこともあってすごいプレッシャーがあって, ○○家連(都道府県の家族会連合会)の打ち合わせのときにも, 私は見学者という立場で, と△△(○○家連の関係者の名前)に言ったら, それでいいよ, と言われたんだけど。やっぱりみなさんが不安に思われているのだから, こんなにおしゃべりでもリーダーになってくれ, というふうに言われて, しぶしぶ受けたんですよ。そんな状態だから, 私も家族の方に(気持ちを)取られて, 気持ちが動いていなかったです, すごく苦しかったです。

その後b氏は, 担当者がそのような大変さを抱えている状態で家族学習会を続けるには, 「お互いに目に見えないところで信頼, 関係づくりをやって」いくことや, そのような担当者一人ひとりの自覚が重要であるとも語っている。それに呼応する形で, 担当者c氏が自分自身の実感を語り, 担当者グループ全体でチームワークの重要性が確認される流れに至っている。

<分節5「チームワークの重要性」>

c：責任者を今年やったんですけど, 本当にみなさんに助けていただいて, 本当に助かりました。bさんが言ったように, チームワークの良さ, 何か困った, といえはすぐに動いてくれる, みなさんのおかげで。

b：そうだよ, 大変だよってメールでくれたりね。何回も, つぶれそう, という感じで。ええ, あの人がつて言ったら, 気持ちがつぶれそうだって。やさしさがあるからそういうことを言えるんですよ, 責任感と。

c：すぐメールで返してくれて, 大丈夫, 大丈夫って。

b：大丈夫, ぶっちゃけてやろうって感じ。そういうつながり, 大事です。

次の分節6では, アドバイザーのa氏がb氏に, 「今日の学習会を振り返って, リーダーとしてどうでしたか。」と声をかけ, 改めて担当者の役割に関する振り返りをお願いしている。a氏は自分が司会にしてはしゃべりすぎたと反省しつつ, 周りの担当者に助けら

れたことを感謝, 評価する発言をしている。それを受けて担当者のd氏が謙遜し, 自分を低く評価する発言を行う。b氏は下記の会話のように, d氏の本来の強みを引き出し, d氏自身の低い評価を修正している。

<分節6「コリーダーの本来の強み」>

d：緊張してるっていうけども, 私の場合は鈍いので。その場になると慌てる人間なのに, 鈍すぎて, ちょっとダメなんですよ。

b：いや, 鈍すぎてるんじゃないくて, 感性が鋭いんだよ, それは!

d：(苦笑して) 言い方ね。

b：言葉の感性が鋭いからね, 他人の言葉をね, 思いやるのよ。私みたいにばって言っちゃってさ, ごめんね, ってすませるんじゃないくて, どういうふうなことが返ってくるかを, あなたはそこまで予測してるから言葉が出ないだけ。ほんとそう思うよ。

これらのやり取りについて, 次の分節7でアドバイザーa氏は, 「すごい, ゆで卵のいい発言ですね。」と伝え, その【振り返りの進行自体が評価される】。そして続いて, 「これをぜひ次に, 参加者に応用してください。」と担当者に伝え, 前述したような【担当者の自己評価が修正される】進行を学習会本番に活かすように促している。(「ゆで卵(理論)」については後述) 分節8では, 分節7のアドバイザーの評価を受けて, 担当者としての言葉かけの難しさについて, b氏から「自分の感性を磨いて, それで自分の言葉で言う以外ないんですよ。」といった感想が述べられている。

<解釈>分節5では, 分節4までプログラム内容に沿う「公的な」振り返りを行っていたb氏が, アドバイザーa氏より「ご自身の言葉による振り返り」を促され, その結果として振り返りの場にふさわしいかどうか分からない「私的な」振り返りが行われた。この段階では, b氏はF2LOモデルでいう対象Oに遠ざかっている。

b氏は, そこから「チームワークの重要性」というプログラム実施に必要な要素の話題に結び付け, それをc氏や他の担当者が展開している。このとき, b氏と共に他の担当者も対象Oに接近した振り返りを行っている。

分節6では, b氏の評価に対してd氏が謙遜し, 自身の「私的な」弱みについて発言している。それに対

し、b氏がd氏の強みを指摘することで、【担当者の自己評価が修正される】。このとき、b氏とd氏の間で「私的な」弱みを安心して共有する関係が成立しており、F2LOモデルで言う2Lの距離が縮まっている。またこれらの振り返りは、b氏とd氏が考える「プログラム実施に必要な要素」の話題と関連付けられているため、同時に対象Oに接近している。

分節5、分節6、いずれも担当者の「私的な」振り返りからプログラムに関連する「公的な」振り返りに結び付ける談話が展開し、結果として初心者担当者—ベテラン担当者間のマイクロな「言説の資源」の偏りが緩和されている。これらをF2LOモデルで記述すると、以下のFigure 3のようになる。

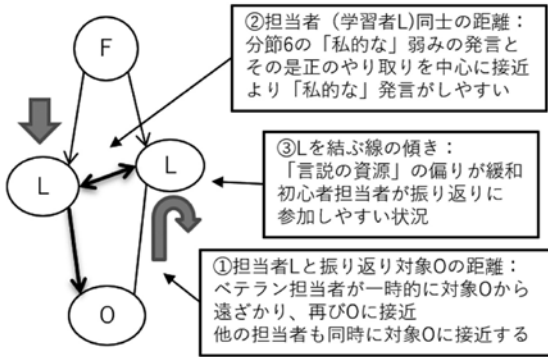


Figure 3: 「場面 2 : 分節 5 ~ 分節 8」のF2LO図

＜場面状況＞「場面 3 : 分節 9 ~ 分節 14」では、これまで発言の少なかった他の担当者からの振り返りがそれぞれ順番に行われている。分節9ではe氏から、「昨年度までの参加者が、家族学習会の担当を引き受けてくれている」状況や、「家族学習会の機会を通じて他の家族会の家族と知り合える」良さについての発言がなされている。

分節10ではc氏から、今年度の参加者募集時に関するトラブルの振り返りが行われている。それらについて、b氏から学習会準備のアイデアが出されるなどの【学習会運営の改善案が出される】やり取りが行われた。

分節11では、今年初めて担当者になったd氏から、家族学習会に対する思い・意欲が語られている。周りの担当者の学習会進行の技術などを始め、「参加者以上の学び」があったという感想を最初に挙げている。

その後の分節12ではc氏から、学習会準備時にチームワークを実感したエピソード（台風の日の事前打ち

合わせにメンバーが集まってくれた出来事）が発言された。c氏のエピソードを受け、他の担当者も「チームワークが大事ですね。」と同意している。

分節13では、同じく今年初めて担当者になったf氏が「去年は参加者ですごく気楽な立場」だったのに対し、「今年は担当者ということで、すごく自覚がありすぎた」と自身を振り返り、リーダーb氏の代わりにその場の進行を仕切ってしまったことについて謝っている。これらのf氏の振り返りに対して、アドバイザーa氏やb氏の応答を通じて、ここでも分節6と同様の【担当者の自己評価が修正される】やり取りが行われている。

最後に分節14で、参加者のフォローの仕方に関するアドバイザーの再コメントでまとめられた。

＜解釈＞「場面 2 : 分節 5 ~ 分節 8」に引き続き、その日の学習会の内容から外れた過去の話題や担当者の個人的な関心事が中心となって進められた。(特に分節12で振り返りを行ったc氏についていえば、家族学習会の事務的な責任者を担当していたため、学習会準備時に苦勞した経験や当時周りの担当者に助けられた経験の印象が初回の学習会の内容よりも強かったものと思われる。) 逆に言えば、そのような「私的な」話題も積極的に共有し合う対等な関係が担当者間で成立している。そしてそのような【担当者の個人的な感情が打ち明けられる】場面から、【チームワークの重要性が確認される】、【学習会運営の改善案が出される】、【担当者の自己評価が修正される】といったプログラム進行の観点から見ても必要なやり取りが行われていた。これらをF2LOモデルと表すとFigure 4のようになる。

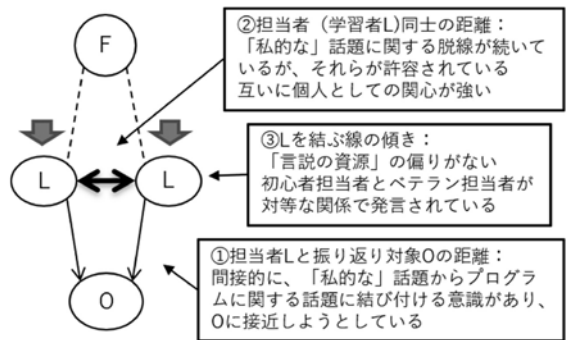


Figure 4: 「場面 3 : 分節 9 ~ 分節 14」のF2LO図

B 「言説の資源」充実の場に関する考察

家族学習会Aの「事後の振り返り」の事例全体について、「言説の資源」充実の条件に関連してみた場合、その特徴として以下の2点が挙げられる。1点目は「ベテラン担当者が行った『私的な』振り返りが、他の担当者の『私的な』振り返りを促した」ことであり、2点目は「振り返り中の『私的な』振り返りを他の担当者がより『公的な』振り返りとして展開した」ことである。そしてこれら2点の特徴は家族学習会Aの場合に限らず、他の学習会や家族会活動の場面でも十分起こりうる。

1点目についていえば、Figure 2 から Figure 4 への推移を見ればわかるように、始めの段階ではベテラン担当者のみがプログラムに沿った振り返りに積極的であり、他の担当者は振り返りに参加しにくい状況が存在した。そこからベテラン担当者が「私的な」振り返りを行い、F2LOモデルで言う対象Oから後退したことで、「事後の振り返り」の場では「私的な」振り返りを許容されるという認識がその場の担当者に共有される。そうして、プログラムに沿った「公的な」振り返りに習熟しきっていない他の担当者も振り返りに参加する余地が生まれたものと思われる。これを「言説の資源」に関わる家族学習会Aの振り返りの特徴として、【振り返りにおける公私の境界線は、家族グループの関係・対話状況によって変化し、それにより家族の私的な発言が促進/抑制される】といった形で表現することができる。また家族学習会の場合、グループ学習に参加した家族が次年度以降、担当者としてその地域の家族学習会に入り、学習の場を支えていくことが期待されている。そのため1点目に見られる初心者担当者—ベテラン担当者の構造は、学習会経験年数の多い家族会でも原則維持され続ける。

2点目の「振り返り中の『私的な』振り返りを他の担当者がより『公的な』振り返りとして展開した」については、分節7のアドバイザーa氏の対応に注目したい。アドバイザーa氏は分節6の担当者のやり取りについて「すごい、ゆで卵のいい発言ですね。」と伝え、【担当者の自己評価が修正される】進行を学習会本番に活かすように促している。ここでいう「ゆで卵(理論)」とは、家族が抱えている困難(黄身)に対して、それらを包み込むように家族ができている対処や強み(白身)に注目していくことで、家族の経験の価値を見直していく対話の姿勢である。これらは本来グループ学習の場で担当者が参加者に対して心がける姿勢・工夫だが、今回の事例を踏まえた場合、振り返り

の場面でも、担当者同士の支え合いの姿勢として学習会本番における姿勢と類似の構造が見られることがうかがえる。学習会本番では参加者の困難に対し、担当者が参加者の強みを発見していくことで家族の力を取り戻すことを目指しているが、担当者同士の振り返りの場面でも、担当者としての自信の無さや気持ちの余裕のなさに対し、互いに強みを指摘し合うことで担当者一人ひとりの力を引き出し、また担当者グループのチームワークを高める場とすることが目指されているものと考えられる。そのため、今回見られた2点目の特徴は家族学習会Aに限らず、ゆで卵理論といったプログラムの原則を積極的に実践する担当者グループに広く見られる可能性が高い。このような二つ目の特徴を、「言説の資源」の観点から【家族の「私的な」振り返りは、家族グループの対話を通じ、グループで共有すべきより「公的な」振り返りとしての価値づけが行われる】とする。

家族の学習の「振り返り」の場にこれら二つの特徴が存在するとき、Figure 2 から Figure 4 の推移に見られるように、家族間のミクロな「言説の資源」の偏りが是正される。また2点目の【家族の「私的な」振り返りは、家族グループの対話を通じ、グループで共有すべきより「公的な」振り返りとしての価値づけが行われる】機能を通じてミクロなレベルにおける「言説の資源」の充実が図られると考えられる。今回の事例に則して言えば、「振り返りの場で話すべきかわからない、個人的な感想・印象」として差し控えた話題を、他の担当者に触発されて思い切って発言した結果、それらが「グループ共通で議論すべき話題」つまり「公共的な」話題として受け止められる経験を積み重ねることにより、「自身の私的な思い、心情もより広く共有されていいものである」という自信をつける、そのような経験が想定される。このようなミクロなレベルにおける「言説の資源」の充実、本論の冒頭に家族支援の課題として挙げた“対話の場”を形成し家族のニーズを広く共有していく上でも重要となる。

また、以上のようなセルフヘルプ・グループ活動の空間は、齋藤の言う親密圏と公共圏の両者の性質、言説が状況に応じて往還する空間であると考えられる。秋津はそのような親密圏と公共圏の中間に位置する性質の空間を「中間圏」と呼んでいる³⁰⁾。この「中間圏」を「言説の資源」論から見た場合、それらの空間は何か「個人的なもの」で何が「公共のもの」かがはっきり定義されていないために、「言説の資源」における公私の境界線が変動しやすい空間であり、家族が抱え

ていた「個人的な感情・印象」の言葉を「グループ共通の工夫・視点」に関する言葉に転換することを可能にする空間であると考えられる。そしてそのように言葉の意味を変化させる空間は、家族同士の相互の再評価を促し、家族が外部に向けて自身を発信する能力を獲得する（＝「言説の資源」を充実させる）ための拠点として機能しうる。家族の「言説の資源」充実の場の条件を考える際、前述の2点の振り返りの場の特徴に先立って、このような「中間圏」としての性質をもつ空間であることが考えられる。

5 本論の総括と今後の展望

本論ではまず近年の精神保健福祉分野における家族支援の課題を述べ、それらの課題を齋藤の「言説の資源」および「親密圏／公共圏」の議論から整理した。その上で、家族の「言説の資源」を充実させる場の条件について考察するため、「家族による家族学習会」の家族スタッフによる「事後の振り返り」の場面を事例とし、家族の「言説の資源」特に「資源【規範】」をめぐる対話・関係の性質の変化に注目して記述・考察を行った。またそれらを記述する際、刈宿らのF2LOモデルを参照することで、「言説の資源」に関する事例解釈・記述の視点を明確にした。その結果、家族学習会Aの事例から【振り返りにおける公私の境界線は、家族グループの関係・対話状況によって変化し、それにより家族の私的な発言が促進／抑制される】、【家族の「私的な」振り返りは、家族グループの対話を通じ、グループで共有すべきより「公的な」振り返りとしての価値づけが行われる】という特徴が見られ、それらが家族の「言説の資源」の充実に関与するものであると考えられた。またそれらの条件の前提として、「中間圏」としての活動空間に着目した。本論の事例検討から得られた知見は、「家族による家族学習会」の振り返りの場面に限らず、「言説の資源」の偏りとその是正可能性が期待される他の対話空間、例えば家族学習会プログラムの他のミーティングや研修の場面、あるいは他のピアサポート活動におけるグループ対話の様相を捉える視点としても応用可能であると思われる。

本論では精神障害者家族の支援の論点を明確にする上で、保健福祉分野における既存の研究動向を主に参照して論点を構築した。今後は他の教育学におけるエンパワメントの議論や振り返り・省察の議論、また公共哲学の議論を参照し、今回論じた「言説の資源」お

よび「親密圏／公共圏／中間圏」論について、教育・学習実践の分析視座としてより明確にする必要がある。その上で、今回論じた「場」の特徴および「言説の資源」の状況が実際の家族にどのような影響を及ぼしているか、家族への継続的なインタビュー、ライフストーリーの記述といった実証的な研究を進めていくことが望まれる。また本論で事例とした「家族による家族学習会」の支援論としても、本論で参照したF2LOモデルの用法・評価の視点をより明確にし、実践家（担当者、アドバイザー）の使用に耐えうるものにしていくなど、実践的な価値を高めていくことが望まれる。

注・引用文献

- 1) 半澤節子“精神障害者家族研究の変遷—1940年代から2004年までの先行研究—”『人間文化研究』vol. 3, 2005, p. 65-89.
- 2) 大島巖“なぜ家族支援か—「援助者としての家族」支援から、「生活者としての家族」支援、そして家族のリハビリ支援へ—特集家族のリハビリをどう支援するか”『精神科臨床サービス』vol.10, no.3, 2010, p.278-283.
- 3) 田野中恭子“統合失調症の家族研究の変遷”『立命館人間科学研究』vol.23, 2011, p. 75-89.
- 4) 伊藤順一郎“家族支援の基本的な考え方—家族が必要な情報の提供、交換についての考察—特集みんなが元気になれる家族支援Ⅰ”『精神科臨床サービス』vol.17, no.1, 2017, p.5-10.
- 5) 蔭山正子“孤立家庭の「二重の障壁」に風穴を空ける”『こころの元気+2017年8月号』特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構（コンボ）, 2017, p.20-21.
- 6) 齋藤純一『公共性 思考のフロンティア』岩波書店, 2000, p.63.
- 7) *Ibid.*, p.64.
- 8) *Ibid.*, p.10-12.
- 9) *Ibid.*, p.12.
- 10) 蔭山正子, *op. cit.*, 2017, p.20-21.
- 11) 例えば伊藤（2017）は「関わりの中で変化する家族のニーズ」の一例として「同居している他の家族メンバーの心身の問題のニーズ」を挙げている。（伊藤順一郎, *op. cit.*, 2017, p.10.）
- 12) 他者を助けることを通じてその援助者自身が助けられる、という考え方である。発案者のRiessman（1965）によると、援助の与え手と受け手が共通の問題を抱えていることで、深いレベルでの共感と内的理解が可能となり、援助者をとくに効果的に機能させるという。（Riessman, F. “The “Helper” Therapy Principle,” *Social Work*, 1965, vol.5, p.27-32.）
- 13) Borkman（1976）が導入した概念であり、個々の当事者・家族の日々の体験に根差した実用的・実践的な知識である。これらをセルフヘルプ・グループの活動を通じて共有することで、互いの問題の共通している部分や相異なっている部分について学び、選択的に知識を利用できるようになるという。（Borkman, T. “Experiential knowledge: A New Concept for the Analysis of Self-Help Groups,” *Social Service Review*, 1976, vol.50, no.3, p.445-456.）

- 14) 三島一郎“セルフヘルプ・グループの機能と役割”〈久保紘章・石川到覚編著『セルフヘルプ・グループの理論と展開—わが国の実践をふまえて』中央法規, 1998) p.42-50. p.12-19.
- 15) 齋藤純一, *op. cit.*, 2000, p.92-93.
- 16) *Ibid.*, p.98-99.
- 17) *Ibid.*, p.94.
- 18) JSPS科研費25463615“精神障害者家族ピア教育プログラムの波及効果とシステムの評価” (研究代表者: 蔭山正子) 成果物パンフレットより引用
- 19) アドバイザーの学習会当日の訪問は, 原則5回あるうち初回と後半回の2回行うことになっている。
- 20) 二宮史織・中村由嘉子・蔭山正子・横山恵子・桶谷肇・小林清香・大島巖“精神障害者の家族ピア教育プログラム (家族による家族学習会) が家族のエンパワメントに与える効果—プログラム実施者と受講者の効果の比較—”『精神医学』vol.58, no.3, 2016, p.199-207.など
- 21) 蔭山正子・横山恵子・中村由嘉子・小林清香“精神障がい者家族会の家族ピア教育プログラムの継続意向に関連する要因”『日本地域看護学会誌』vol.17, no.2, 2014, p.36-44.
- 22) 池末美穂子“当事者の家族「精神障害者の家族会」特集 セルフヘルプ・グループの現状と課題”『保健の科学』vol.44, no.7, 2002, p.510-514.
- 23) 当時の全家連によると, 2004年3月時点で全国の家族会数は1,701あったとされる。一方, 2012年4月時点での家族会数は1,209まで減少している。
(全国精神障害者家族会連合会『平成16年度評議委員会資料—平成15年度家族会活動・精神保健福祉施策資料集』全国精神障害者家族会連合会, 2004.)
(高村裕子“家族会”〈精神保健福祉白書編集委員会編『精神保健福祉白書2012年版』中央法規, 2012) p.8.)
- 24) 筆者は2016年9月~12月の期間にかけて, 家族の「事後の振り返り」の場の役割検討を目的にした調査を行っている。埼玉, 千葉, 横浜それぞれ2件 (計6件) の家族会にて実施された家族学習会の参与観察, 及び家族へのインタビュー調査を実施している。本論の議論及び事例検討はそれらの調査結果をふまえたものとなる。
- 25) これらのデータ収集及びデータ分析手続きは, 研究で得られたデータや録音テープのプライバシーの保護, 個人の匿名性の保障, 個人の人権及びプライバシーの保護への十分な配慮等, 個人情報に関する倫理的配慮を踏まえた手続きについて, 東京大学ライフサイエンス委員会の審査を受け, 承認を得ている。(審査番号: 16-98)
- 26) 重松鷹泰『授業分析の方法』明治図書出版, 1961.
- 27) 日比裕・的場正美編『授業分析の方法と課題』黎明書房, 1999.
- 28) 刈宿俊文・佐伯胖・高木光太郎 (編)『ワークショップと学び3まなびほぐしのデザイン』東京大学出版会, 2012.
- 29) 高木光太郎“イントロダクション: ワークショップのF2LOモデル「まなびほぐし」のデザイン原理”〈刈宿俊文・佐伯胖・高木光太郎 (編)『ワークショップと学び3まなびほぐしのデザイン』東京大学出版会, 2012) p.12-14.
- 30) 秋津元輝・渡邊拓也編『変容する親密圏／公共圏: せめぎ合う親密と公共 中間圏というアリーナ』京都大学学術出版会, 2017,

(指導教員 牧野篤教授)